

# マルコ福音書の中の病人とキリスト

東京教区 補佐司教 幸田和生

2015.10.18

上智大学目白聖母キャンパス

幸田司教様は 1976 年、東京の成城教会にて受洗され、1985 年、カテドラルにて司祭に叙階されました。その後、高円寺教会、高幡教会、東京カトリック神学院、西千葉教会、潮見教会で司牧、養成にあたられ、その後教区本部で御活躍されております。2005 年にはカテドラルにて司教に叙階され、現在に至っておられます。著書の「ゆるしの力」「福音をきくために」等を通して主の喜びと希望を見出すイエスのメッセージを伝えてこられました。



## はじめに

「生きる意味を問う」というとても大きなテーマの大会に招かれて、お話をしようにとのことですが、とても難しいと感じていました。私にとって生きる意味は、キリストの関係の中にしかないと思っていますが、私がそれを感じていてもそれを人に伝えるのは結構難しいと感じています。

看護師さんたちの前で、生きる意味について話すことはないとも思いましたが、引き受けてしまいました。引き受けたのは、ひたすら看護師さんたちへの尊敬と感謝のためです。私はほとんど病院に縁のない人間で、手術を受けたことも、入院したこともありません。ただ、東京教区の司祭のお世話をするのもわたしの役割ですので、司祭のお見舞いとか病院に付き添ったりすることは結構あります。今は、東京カテドラルの中にある「ペトロの家」という高齢と病気の司祭の家のお世話もさせていただいています。4 年位前に出来たその時は、身の回りのことは自分でできる司祭が入るということでスタートしました。でも、皆さん高齢ですので、年を追うごとにだんだん身の回りのことも難しくなってきました。健康上の問題も多くなり、ずいぶん大勢の看護師さんに手伝っていただいています。そして、看護師さんという方々と身近に接するようになり、とにかく尊敬しています。

だいたい「司祭はわがままだ」って言われますね。そんなに簡単にうなずかれ

ると困るんですけど……。でも、私は決して司祭はわがままでとは思っていないのです。司祭は家族がありませんので一人で何もかもやってきたという所があるわけです。自分なりの生活スタイルがはっきりあって、一緒に住んでいる人に気を遣って合わせる必要がないわけで、自分なりにこれで良いと思ったやり方を何十年もしてきているのです。それで別に大きな問題がなくやってきたのです。ところがだんだん自分の身の回りのことができなくなってきた時に、周りから見たら「とんでもない」ということがあります。「なんでこんなボロボロのズボンをはいているんですか」と言うと、「そんなの放っておいてくれ」となるわけです。別にわがままというよりも自分のスタイルがもう出来あがっちゃっているんで、それを変えたくないし、人にとやかく言われたくないという……。やっぱりわがままでしょうか。とにかく、人の世話になるのが難しい人であることは確かだろうと思います。今、ペトロの家で色々な神父さんを見てみると、だいたい人の世話になりたくないのです。むしろ人の世話をしたいぐらいですね。神父ですから、周りの人に「ああいうことをしてあげたい、こういうことをしてあげたい」と。それでかえって周りを混乱させたりするんですけども、人の世話にはなりたくないのです。だから看護師さんやスタッフが色々言ってもだいたい素直にはきかない。そういう状態で、それを見ていると、私なんかでも、「なぜ言うことを聞かないんだろう」「なんで勝手なんだろう」と腹が立つのです。ところが、看護師さんはそうじゃない。「この人はこういう状態で、こういう問題がある。」でも、それを無理に直そうとしないのです。普通は「この人が悪い」って思うでしょうが、みなさん看護師さんはそう思わないようです。だって、そんなこと言ったらきりが無い。頑固な患者さん、わがままな患者さんなんていくらでもおられる。それで、「この人が悪い」と言ったら何も問題は解決しないのを良く御存じです。看護師さんは、「こうやって生きてきて、このスタイルは変えられないし、この性格も変えられないけれど、じゃあどうしたらいいだろうか」というふうを考える。忍耐強くかかわって下さるのを見て、本当に尊敬するようになっていきます。そういうことなかで、看護師ってすごいことなんだなと日々感じておりますので、頼まれてなんとなく引き受けてしまいました。

それで、私に何が話せるかと思ったんですけども、やはり、イエス様が私達の一番の生き方のモデルだと思いますので、イエス様は病人とどのようにかかわったのかということをやっとていねいにみたら、何か役に立つのではないかと思いました。

イエス様は神のひとり子であって、イエス様の教えだから「病人を愛しましょう」と、もちろんそうやってしまえばそれだけのことでですけども、でも、もっていねいに、二千年前のあの社会の中でイエス・キリストという方が、どのように病む人に出会い、かかわり、その人々に何をもちたらしめていったのか。その

ことを今日、この時間で一緒に見つめていけたらと思います。

「マルコ福音書の中の」というタイトルにしました。福音書の中でイエス様の姿はいっぱい伝えられていますけれど、マルコに絞ろうと思いました。四つの福音書がありますけれども、おそらく最初に書かれたのがマルコ福音書なんですね。マルコは最初に福音書を書いたというだけではなくて、福音書というスタイルの文学（とっていいでしょうか）を生み出した人でもあると思います。

最初期のキリスト教のメッセージで、一番有名なのは使徒パウロによるものです。パウロがイエス様について語っていることは、本当にわずかといえはわずかです。パウロはイエス様の中に救いを見出しました。そのイエス様の生涯のポイントは何かといたら、ほとんど「十字架につけられて死んで復活した」というその一点です。パウロはその一点のみで、イエスの生涯について他のことはほとんど言っていません。

ところが福音書というのはそうではなくて、十字架の死に至るまでイエス様は何をなさったか、どういう風に歩いていかれたかをていねいに追っていきましょう。それは、マルコという人が特別に何か感じて生み出したスタイルだと思います。後で、マタイ、ルカ、そしてヨハネという人もそういうスタイルでイエス様のことを伝えようとするわけですが、本当にていねいにイエス様がどこで何をなさったか、どんな人とどんなふうに出会って、どうかかわっていったか、それを伝えます。そのことがとっても大切だと感じたのはマルコという人だと思います。

マルコは、どうやって福音書を書いたのでしょうか。これももちろんよく分かっていませんが、マルコ福音書が書かれたのはだいたい紀元70年ぐらいでしょう。イエス様が実際に生きていた時からすれば40年くらい経って、マルコ福音書は書かれています。その間に、イエス様についての色々な思い出話があちこちに残っていました。それを、マルコは特にガリラヤ地方というイエス様が活動していた地域に行き、そこに残っていた人々の記憶、イエス様についての思い出話を集めてきて、それを自分の福音書にまとめていったのではないかとされています。だから、素朴ですよ、言ってしまうと。難しい教えはたくさんありません。あるいはイエスの十字架の死と復活にどんな意味があるか、そのような神学的なこともないです。そうではなくて、マルコが大切にするのは、病人のいやしの物語、奇跡のような物語、そういう民間の人達が何か感じて大切に伝えてきた、素朴な人達に分かりやすい、そういうような話です。そういうようなものがマルコの福音書の中にたくさん伝えられていると思います。その中心とも言えるのが病人との出会いの物語です。そういう目でマルコ福音書を見ていけたらと思います。

## 1. イエスの時代の病人たち

大雑把に、病人とイエスのこととお話したいと思いますけれども、二千年前のユダヤの社会で、病人がおかれていた状況というのは大変なものがありました。まず、もちろん肉体的な病気がその人を苦しめているということがありました。そして「医者」といえるような人が当時も存在したようですけれども、そこにかかれば凄いお金がかかるし経済的にも苦しくなりました。でも福音書を見ると、この病人の人達は、そのような肉体的な痛み、あるいは経済的な困窮というだけではなくて、いろんな面で世間からの偏見や差別に満ちた目で見られていたということがあります。あとでていねいに見ますけれども、一つは罪との関係です。病気というのは罪の結果だというような見方がありました。わたくし事ですが、今度の月曜日に健康診断を受けます。私は、一応、肺がんの検査もしてもらうことにしているのですが、何十年も煙草を吸っていて、そして兄は膵臓がんで亡くなっていますから、自分もいつかそうなっても仕方ないだろうと思っているのです。まあ、病気は罪の結果だ、散々あんなに煙草を吸ってきたのだから自分が癌になってもしょうがないだろうと思っている面があります。そういう単純な、現代の私達でも感じるような病気と罪との関係というものもあるかもしれません。

しかし、もっと当時の考え方は、それだけではありません。人間のあらゆる不幸は、なんらかの罪の罰としてその人に与えられるという考えが強くありました。罪の結果として何かの病気や不幸が起こるという考えが凄く強かったです。

病気の人というのは、大変な思いをして苦しんでいる人で、助けなければいけない人でしょう。それなのに、まず「病人というのは罪人だ、神さまから程遠い人間だ、何かの罪の結果、ああいうふうになったのだからしょうがないんだ」という見方をされてきました。病人だというだけで罪人のレッテルを貼られてしまっていた、これが一つの問題だと思います。

それから、汚れという問題もありました。これも後でていねいに話したいと思いますけれども、当時の考えとして、神さまは聖なる方であり、その神さまから離れてしまうことが「汚れ」でした。汚れと清めというのが凄く大切でしたが、病気というのは汚れだ、という見方がありました。特別に聖書の中ではっきり言われるのは、今、聖書で「重い皮膚病」と訳されている病気ですね。現代医学のハンセン病という病気に通じるところがありますけれども、現代医学の病名を聖書の病気にあてはめるのもちょっと難しい面があります。「重い皮膚病」と訳されている病気、それは病気というよりもまず宗教的な汚れとみられていました。それから、12年間出血の止まらない女性が聖書に出てきますね。この女性の出血も宗教的な汚れとみられていました。そういう人たちは汚れた人間というレッテルを貼られてしまします。本当に本人にとっては辛い話だと思いません。

もうひとつ聖書で特徴的なのは、「悪霊」との関係ですね。悪霊というのは現代人には理解しにくいと思います。何かしら人間の力を超えた大きな力、目に見えない力を感じた時に、古代の人はそれを「霊」と呼びました。そして、霊には良い霊と悪い霊がありました。神さまから来るものであれば、それは聖霊という霊だし、逆に悪い力であれば、それは悪霊といいます。分かりやすくいうと、聖霊というのは神さまと人間とを結びつけるような力ですね。逆に言うと、悪霊というのは神さまと人間とを引き離すような力。あるいは、聖霊というのは人間と人間とを愛によって結ぶ力、だとすると悪霊は人と人とを引き裂いて行く力。そう考えれば、分かりやすいかもしれません。それで、病気は悪霊のしわざだという考えが凄く強かったのです。そういう、人間の力を超えた悪の力が、人間を病気の状態にしてしまうと考えられていました。

私達が聖書を読んで、「悪霊にとりつかれている」という状態をみると、悪魔つきというよりも、やはり精神的な障害だったり、あるいは何らかの形で他の人とコミュニケーションが取れなくなっているような状態のような感じがします。しかし当時の考えは、それは悪霊の力だと考えられていました。今からすればものすごい差別と偏見を受けていたというのが当時の病人の問題でした。

今でも病気と差別、偏見ということはつながっているかもしれません。例えば、エイズという病気は、もの凄い差別と偏見につながっていましたね。日本の中でも本当にそうだったと思います。エイズの問題が起った時に、それに対して非常に敏感に反応したのは、私が知っているのは、元ハンセン病の患者さん達でした。ハンセン病の患者さん達はもの凄い差別と偏見をずっと受け続けていましたので、エイズのこと、あるいはいろんな感染症の問題で、人がビリビリと神経質になっていた時、そういう時に（もちろん感染症の問題はあるんですけど）、それによって差別とか偏見が強くなってしまふことに凄く危機感を持ったのだと思います。

## II. イエスの「いやし」とはどういうことか

イエスの時代は、そういう、人々からの差別や偏見に病人は苦しめられていました。そして、福音書を見ると、イエス様はそういう病人と出会って病人を「いやした」と書かれています。これもやっぱり現代人からみれば、いったいどういうことだろうと首をかしげることでしょう。福音書の中のいやしの物語とはいったい何なのだろう。素直に、それはイエス様が神さまからの力でなされた奇跡だと思えるかもしれませんが、でも、逆にこんなことはフィクションで作り話じゃないかと思う人もいるかもしれません。ただ、何かしらイエス様が病人をいやすということをしていたのは疑いようがないことです。今の医学でどういう説明がつくか、そんなことは分からないですけれども、当時、不思議な力で人の病気をいやすような働きをしていた人は、イエスだけじゃなくてほか

にも居ましたし、イエスがなんらかの形で病人をいやすということをしていたのは間違いないと思います。

そして、後で出てきますけれども、イエスが病人を治すことができたかどうかは、聖書の中ではほとんど問題にはなっていません。現代人だったら「この人本当に病気を治せるんだろうか」と疑うでしょう。テレビなんかで怪しげな治療をしている、超能力者みたいな人が出てきますけれど、そんなのを見ると、「本当なんだろうか」「これ、嘘なんじゃない」というのが出てきますが、少なくとも福音書の中ではそういう問題は全然出てこない。問題は、イエスが病気を治したのが安息日だったとか、そういう全然違うことが問題になっています。そういうことを考えても、イエス様がなんらかの形で病気をいやしていたのは間違いないと思います。

それを今の私達がどう理解することができるか。いろんな人がいろんなことを言っていますが、私はアルバート・ノーランという人の『キリスト教以前のイエス』という本の理解が、私なりに一番納得できるかなと思っています。このアルバート・ノーランという人は、ドミニコ会の司祭で、アパルトヘイトの時代から南アフリカでずっと活動している神父です。南アフリカの人種隔離政策でひどい人権侵害がある中で、イエス様の福音を伝えようとしてきました。彼は世界中のドミニコ会の総長に選挙で選ばれたのですが、「自分は南アフリカで活動を続けるべきだ」と言って、断りました。このノーランという人が、キリスト教が出来あがって、「イエスは神の子キリストである」という信仰が確立していく以前の、本当に生きていた生身のイエスはどんなだったろうということを研究して書いているのが、『キリスト教以前のイエス』という本です。

ノーランは、イエスのいやしは、「信仰と希望の勝利」だというような言い方をします。さっき言ったように、病気の人には肉体的な痛みだけではなく、差別と偏見を受けて絶望の中に閉じ込められていました。「お前の病気は罪の結果だ」と言われたら、どうしようもないわけです。じゃあどうしたらいいのか、その原因となった罪は何なのか、分からないですよ。改めようがないです。だとしたら、もう罪の結果なのだからしょうがないと思わざるを得ない。「汚れ」もそうです。お前は汚れているんだと言われたらどうしようもないです。悪霊のしわざだと言われたらこれもどうしようもないです。そういう、病気であることをあきらめざるを得なかった、病気の中で絶望していた人々にイエスは近づいて行って、そして、「いや、神さまは決してあなたを見捨てていない、神さまは本当にあなたのことを大切にしている、あなたが立ち上がって歩きはじめることを望んでおられるのだ」。そのメッセージを語っていくんです。「だから、神さまに信頼しなさい、神に希望をおきなさい」。こういうメッセージをイエスは語っている。そうした時に、病人の中に自分は病気だというあきらめから立ち上がっていく力が与えられる。本当に信頼と希望の力が与えられる。そういうことだったんじゃないでしょうか。皆さんのような医療従事者の方に向かってこう

いう話をして、どうお感じになるかわかりませんが、でも、やっぱりありますよね。本当に人間は内面から変えられた時に、あきらめと絶望から信頼と希望へと変えられた時に、人間全体として、心も肉体も健康になっていくことは有り得るだろうし、イエスのしていたことはそういうことだったとみたら、ずいぶん福音書のいやしの物語がわかりやすいような気がします。

### III. イエスの病人に対する関わり方

#### (1) 重い皮膚病の人のいやし（マルコ 1・40—45）

さて、これから実際に福音書のイエス様の姿、どんなふうに関わりかかっていたかを見たいと思います。最初、「重い皮膚病の人のいやし」。マルコ福音書の 1 章 40～45 節までです。

さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。

イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。

イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、言われた。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」

しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た。

マルコ福音書の初めのほう、第 1 章です。重い皮膚病を患っていた人、さっきもお話しましたが、伝統的には日本語の聖書では「らい」とか「らい病」と訳されてきました。でも、1990 年代に「らい予防法」というのが廃止されて、それをきっかけに、「重い皮膚病」という訳に変わりました。現代医学の病名を聖書の中の病名と一致させることは無理なので、重い皮膚病でも良いかなと思いますが、重い皮膚病と言っただけでは、その人達が何千年も前から負わされてきた苦しみ、人々からの差別、偏見の痛みというものがちょっと感じにくいかもしれません。でも、そういう病気ですね。その病気の人ですけれど、旧約聖書の中にその病気と宣告された人がどうなるかということが書いてあります。宣告するのは祭司です。お医者さんが病気を診断して病気だと宣告するのではなくて、祭司というエルサレムの神殿に仕えていた宗教家が、宣言する。どういふふうに関わりかかるといふと、「病気だ」というのではなく、「お前は汚れている」と宣言するのです。凄いですよね。そして汚れているとされた人はどうなるか

というと、共同体から追放されます。自分の住んでいる村や町から追放されて、そして、一人で住まなければなりません。「独り宿営の外」とよく言われますが、そこに住まなければいけない。汚れていると宣言されることによって、もう、神さまとの関係が断ち切られ、そして共同体から追放されることによって、人との関係も断ち切られてしまいます。そういう状態におかれるのです。旧約聖書によれば、他人が誤って自分に近づかないように、人が近づいてきたら、「私は汚れている、私は汚れている」と言わなければいけません。自分でそう言わなければいけないというのは、大変なことだと思います。二千年前、三千年前に伝染病とか感染症という考えはないと思います。しかし昔の人は、「汚れは移る」と考えていました。だから、汚れた人に近づくと、汚れは移るから、うっかり触れないように、誰もその人に近づいてはいけませんでした。またその人も他の誰にも近づいてはいけません。旧約聖書の律法でそのように決められていたんです。その人が、精一杯の思いでイエスの所に近づいてくる。「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」。直訳では、「あなたが望むなら私を清くすることがおできになります」。そして、イエスが深く憐れんで手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われました。「深く憐れんで」という言葉については、今年亡くなった東京教区の司祭で佐久間彪神父さんのことが思い出されます。最後、桜町の聖ヨハネホスピスでお世話になりました。佐久間神父さんは、この「深く憐れんで」と訳されている言葉を、「はらわたする」というふうに訳しました。目の前の人の苦しみを見たときに、こちらのはらわたが揺さぶられる。プリントに、「スプランクニゼスタイ」というギリシア語の言葉を書きました。「スプランクナ」というのは「内蔵、はらわた」の意味なんです。それを無理やり動詞にしたのが、「スプランクニゼスタイ」という言葉です。目の前の人の苦しみを見た時に、こちらのはらわたが揺さぶられる、そういうことを表す言葉ですね。だから、佐久間神父様は、「はらわたする」と訳しました。

「深く憐れむ」というよりはですね、普通の日本語で言えば「胸を痛める」という感じでしょうか。ああ可哀そうにというのではなくて、本当にその人の苦しみを自分の体で感じてしまう、そういう感じのことでしょう。これはもともとのギリシア語にはなかった言葉です。もともとのギリシア語に「スプランクナ=はらわた」という言葉がありました。それに動詞の語尾をつけて動詞化した。「お茶」という名詞に動詞の語尾をつけて「お茶する」、そういうようなことですね。誰がつくったかということ、ユダヤ人が作ったギリシア語です。何のためにつくったかということ、旧約聖書をギリシア語に翻訳するためです。旧約聖書にある神様の愛をなんとかギリシア語で表現しようとした時に、「スプランクニゼスタイ」という言葉が生まれました。新約聖書の中には何回かこの言葉が出てきます。ここではイエス様が重い皮膚病の人と出会って、その人を見て、はらわたするんですね。そして、手を差し伸べてその人に触れます。

実は、聖書にはやっかいなことがあります。昔、聖書は全部手で書き写されて



きましたね。印刷術が近代になって発明される前は、全部手書きだったのです。現代でも、古代の「写本」と呼ばれる手書きの聖書はいっぱい残っています。いっぱい残っている中で、重要な写本でもやっぱり中身が微妙に違うんです。この箇所は、実は、もうひとつ違うバージョンがあります。そこでは、「イエスが深く憐れんで」、ではなく「イエスは『怒って』手を差し伸べてその人に触れ」とあります。なんで怒るんだろうと思いますよね？「深く憐れんで=はらわたして」の方が分かりやすいです。でも、「怒って」と書いてある写本があることは事実だし、結構それは重みのある写本なんです。考えてみてください。手で書き写す時に「深く憐れんで」と書いてあるのを、わざと「怒って」と書き換えるのは有り得ないと思います。わざと分かりにくく書き換えることは有り得ない。でも逆に、もともとが「怒って」だったとしたら、「えっ、イエス様が怒るのはまずいよ」、なんて思って、「深く憐れんで」と書き換えちゃったかもしれない。そうすると、本来は「怒って」という方が、本来の聖書のマルコが書いた通りなんじゃないかという考えが強くなります。けれど、「怒って」だとしたら何に対してなのでしょう。イエスはその人に対して怒っているわけではないです。その人を苦しめている何ものかに対してです。病気の力に対してかもしれないし、あるいは周りの人々の差別、偏見に対してかもしれない。本当にその人を苦しめているものに対して怒っている。そう考えると、「はらわたして」にも通じる所があるかもしれません。イエスはとても大きく心を揺さぶられて、その人に手を差し伸べます。誰も触れてはいけないんです。汚れが移るから誰も触れようとしない。その人にイエスは手を差し伸べる。もちろんイエス様は神の子ですから、汚れが移らないというふうにも言えるかもしれません。しかしそこには、本当にその人の苦しみを一緒に引き受けようとする、共に苦しもうとする、そういうイエス様の心が表れているだろうと言っても良いと思います。何よりもイエスが手を差し伸べてその人に触れるんです。そして、「よろしい、清くなれ。わたしが望む」と言われる。そうすると重い皮膚病は清くなったというふうに言われています。

旧約聖書には、その人が祭司によって重い皮膚病と宣告されるための細かい規定があります。こういう症状が現れてこうだったらこの病気だと宣告される。でも同時に、ちょっと分かりづらいのですが、「清くされた」と宣言される時の規定もあるのです。この人がこういう状態だったけど実はこういうふうになって、祭司が詳しく調べて、こうなっていたら「あなたは清い」と宣言するというのがあるのです。本当に現代医学の病名とはぴったり当てはまらないだろうと思いますけど、でも、この病気は清くなる、治るということもあり得ると考えられていました。治ったのを宣言するのも祭司でした。

「そして、イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、言われた。『だれにも、何も話さないように気をつけなさい。』」これも特徴ですね。イエス様は何か不思議なしかたで病人をいやす、あるいは障害を持った人

を治すということをしませんが、そのことを言い広めないように、口止めをするということがよくあります。イエスは、奇跡とか病人のいやしということによって有名になったり、そういうことによって自分を理解されたりするということを好まなかったようです。ではなぜいやすのかと言ったら、それは、目の前の苦しみを見るに見かねて、手を差し伸べ、その人を助けようとした。そんな感じだと言っても良いと思います。

そして、ここでは口止めをしておいて、「ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」と言います。これは旧約聖書に定められた手続きです。祭司に体を見せて、よく調べてもらって、そして清いと宣言されるためには、清めのための供え物を捧げなければならない。それで、人々に証明する。体が治ればそれでいいのではないのです。体が治った、イエスと出会って、なぜか不思議にもその病気は治った、清められた。でも、彼はそれだけでは元の生活に帰れません。祭司の所に行って、あなたは清いと宣言されて初めて元の生活に戻ることができます。共同体に復帰することができるのです。イエスはそこまで考えていらっしゃる。「あなたの汚れはもう清められた」ということは、神さまから程遠いと思われていたその人が神さまとつながっている、神さまはこの病人を慈しんで下さり、神さまとこの人との絆は取り戻されたということです。同時にイエスはこの人と他の人々との絆を取り戻そうと、そのために祭司の所に行くように命じています。そういう物語ですね。

感じて下さい。イエス様がどんな風に病人とかかわっていたのか。神さまから引き離されていた、程遠いと思われていた人をもう一回神さまとの関係に連れ戻し、人との間を完全に断ち切られていた人を、もう一回、人とのつながりの中に取り戻す。そういうことなのです。

「エンパワメントとリコネクション」という言葉をプリントに書きました。私は、10年以上前に、この言葉に出会いました。どこで出会ったかと言いますと、ある本の中です。ジュディス・ルイス・ハーマンというアメリカの女性の精神科医が書いた『心的外傷と回復』（みすず書房）という本です。ハーマンという人は PTSD の専門家です。ずっとレイプを受けた女性の支援をしてきた精神科医でした。アメリカでも以前は性的暴力を受けた女性たちに向かって、「もうそんなことは済んだことなんだから早く忘れなさい」というようなことが平気で言われていた。でも、レイプの被害者の女性達とかかわってきたハーマンは、彼女達は、一回のそういうことで、心の中にももの凄い傷を受けて、その傷はずっと後々まで影響していくということを分かっています。危険はもう去っている、ひどいことはもう去っている。しかし、その体験は心の傷となっていてずっと後々まで続いていく。これはもう一つの研究と出会って結びつきました。それは何かというと、皆さんご存知だろうと思いますが、戦争帰還兵の問題ですね。

戦争で生きるか死ぬかというとんでもない体験をした兵士が戦争から帰ってきた後も、ずっと心理的障害を抱えて生きていくことになる。アメリカではこれは特にベトナム戦争という訳の分からない、全然大義の見えないような戦争の中で大きな社会問題になりました。多くの若者がベトナムに行って帰って来て、心理的な問題を抱えて社会不適應となっていたのです。その戦争帰還兵の問題とレイプの被害女性との問題はずっと別々に研究されてきたのですが、実は両方とも心の中で同じことが起こっているということが分かるようになって、それが PTSD と名づけられることになりました。Post-traumatic stress disorder という診断名につながっていくことになったのです。

ハーマンは、『心的外傷と回復』という本を書きましたけど、彼女はこう言うんですね。「トラウマとなるような体験の中核にあることは、ディスエンパワメントとディスコネクションだ」。

話が脇道に行きますが、一つだけ。例えば、レイプの被害にあった女性を考えても良いです、戦争で生きるか死ぬかの体験をした人でも良いです、あるいは災害の場合もありますね。この『心的外傷と回復』という本が訳されたのは、1990年代だったと思いますが、訳した人は神戸大学の中井久夫さんという精神科の教授でした。阪神淡路大震災の時に日本でも PTSD という言葉が広く知られるようになりました。その時にこの本も訳されたんですけど、大震災という生きるか死ぬかという経験をした人が、震災はもう終わったのにずっと心の傷のようなものをひきずっていく。そういうことで有名になったんですね。とにかく、犯罪でも戦争でも自然災害でも、何かとんでもないことを経験した人が、一つに強烈に感じることは、自分の無力感です。全く自分は抵抗することができなかった、何もすることが出来なかった。ただただなんていうか、暴力と恐怖の中において、何もすることができなかった。その人の力を根こそぎ奪ってしまうようなこと、それがトラウマとなる体験の中核にある。それをディスエンパワメントというのです。

もうひとつはディスコネクション。関係を断ち切ってしまうこと。その時に誰も助けてくれなかった。その兵士たちもその女性たちも、本当にひどい目に会った時に、母を求めて叫び、神を求めて叫び、でも助けは与えられなかった。そうした時に、本当に人との関係が断ち切られてしまう。誰も私を助けてくれなかったからです。そして、神さまとの関係さえも断ち切られてしまった。日本語ではディスエンパワメントを「無力化」、ディスコネクションを「離断」と訳されていますけど、この無力化と離断ということがトラウマとなるような体験の中核になることだ言います。

だから、このトラウマからの、PTSD からの回復の原則は、「エンパワメント」と「リコネクション」だとハーマンは言うのです。「エンパワメント」、本当にその人が力を取り戻すことと言ったら良いでしょうか。外から力を与えるというよりもその人の中にある力を認めてそれを引き出していくこと。これがエンパ

ワメントです。そして、「リコネクション」。断ち切られた関係を取り戻していくこと、人との関係を取り戻していくことです。そしてもちろん神さまとの関係というのもそこにあるでしょうけど。全く孤立無援になってしまって、もうどうもしようもなくなってしまっている人との関係、もっと豊かな関係を取り戻していくリコネクションが、PTSD の回復のためには一番大切なことだと言うんです。

私は、この本を凄く良く読みました。その頃、ある教会で働いていましたけれども、そこにはリストカットをした中学生とか学校に行けなくなった子ども、そして、聴けば親の暴力があったり、夫のドメスティック・バイオレンスがあったり、という人にたくさん出会いました。いったい何がこの人達の中で起こっているんだろう、どういうふうにして少しでも支えられるんだろう、そんなことを考えているときに、この本に出会ったのです。ですから凄く助けられました。一時、この本ばかり読んでいました。この本の帯には、「PTSD のバイブル」と書いてあるんですが、聖書よりもその本ばかり読んでいたような時期があったんですね。

この本を一生懸命何度も何度も読み返して、ある日、ふと聖書に戻って見たんです。マルコ福音書を読みました。そして、イエスがなさっていたのはこれじゃないか、と私は思いました。福音書に出てくる病人達は一見、もう全ての力を奪われてしまったような人です。しかし、その人の中に回復する力がある、とイエスはみるのです。その人も神の子どもであって、その人も立ち上がる力があるんだと。イエスの方がその人に信頼をおく。そして、その力を発揮できるようにする。そして、イエスは、断ち切られていたその人と神さまの関係、人との関係を取り戻していく。イエス様が病人に対してなさったことはそういうことではないかと思うようになりました。今も結構そう思っていますのでこの言葉を紹介しました。

## (2) 中風の人のおやし (マルコ 2・1—12)

数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、四人の男が中風の人を運んで来た。

しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れていくことができなかったので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。

イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。

ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとり

のほかに、いったい誰が罪を赦すことができるだろうか。」

イエスは彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。

「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」

その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出ていった。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って神を賛美した。

もう一人の病人、中風と言われています。これも病人のいやしの物語ですがけれども、イエス様が病人を探しだして治そうという感じはほとんどないです。いつもたまたま出会ってしまう。向こうからやってきてしまう。その人を見過ごすことができない、放っておくことができずに何かするという感じです。ここでもイエスの居る家の所に病人が連れて来られます。そして群衆に阻まれて、イエスのもとに連れていくことができなかつたので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。パレスチナの家というのをあまり良く知りませんが、壁は石を積んだ壁です。石を積んだ壁だからがっしりしているんですけど、屋根は雨の少ない所でもあるしそんなにがっちりしてなくていい。なんか枝を渡して土で固めたくらいのもので、剥がせたのだと言われています。

ここでは四人の男が中風の人を運んできたというのも特徴的です。先ほど見た重い皮膚病の人は、共同体から、村から追放されていました。全くの孤独で、孤立していたわけですが、この中風の人には四人の友人が居た。それはとても救われる感じがしますね。5節の所に、イエスは「その人たちの信仰を見て、中風の人に、『子よ、あなたの罪は赦される』と言われた」とあります。その人達の信仰。この病気の中風の人達の信仰だけではない、その中風の人を一生懸命運んで来た友人達の信仰です。

福音書の中の「信仰」という言葉は、現代のわたしたちが考える信仰とはだいぶ違います。「あなたは神を信じますか」という時に、「信じる」というのは神さまが存在すると思っているのか思っていないのかということです。現代人はそういうのを「信仰」と考えがちですね。でも、福音書の中の信仰というのはそうではない。なぜならば、二千年前のユダヤで、神さまが居ないと思っていた人は一人もいないからです。みんな、神さまは居ると思っているんですけど、その中で「信仰」と言ったら、本当にその神に信頼して神に自分をゆだねて生きるかどうかという生き方の問題です。この人たちの信仰というの、別に神さまについてどう考えているか、ということではないです。この友達を助けたいという

一心でイエスの元に近づいてきた、その態度そのものですね。それを「信仰」とここでは言っています。その信仰をみて、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。これもびっくりするような言い方ですね。私が突然聖母病院の病室に行き誰か患者さんに向かって「子よ、あなたの罪は赦される」と言ったら、その人は怒りだすかもしれません。「この神父はなんで私をいきなり罪人扱いするんだ」と。

先ほども言ったように、当時、病気は罪の結果だという考え方が強かったです。周りの人もそう思っていたし、本人もそう思わされていたのです。だから、その人を起き上がらせるために、その人を立ち直らせるために、その人の罪は赦されていることを宣言する必要があったのだらうと思います。イエスは決して「あなたは罪人だ」と宣言しているのではなく、本当に、「あなたは罪から解放されている」ということを宣言するのです。それに対して周りにいた律法学者が、「とんでもない、神さましか人の罪を赦すことはできないのに、なんでこいつは勝手に罪を許しているんだ」と考えます。「神さましか人の罪を赦すことはできない」というのは正論なのでしょう。問題は、この律法学者の態度です。律法学者という人は聖書について詳しく研究している人たちでしたが、この中風の人をどう見ていたのでしょうか。律法学者の見方からすれば、「この人が病気なのは、何らかの罪の結果だ、何かこの人が罪をおかしたから、この人は病気になってしまったのだ」。そういうふうにその人について説明をつける、この人が病気なのは、罪をおかしたからだ」と説明をつける。そうしたら律法学者は何もしなくていいわけですね。目の前でこの人が苦しんでいるかどうか、そんなことは関係ありません。その人の病気は罪の結果だと説明すればそれで良かった。それが律法学者の態度です。でもイエスは違うんです。イエスは、この人の病気が罪の結果かどうか、そんなことよりも、本当に目の前のこの人の苦しみにどう自分がかかわっていくか。そこで、その人に接していくんですね。8-9節の、「中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。」不思議な言葉だと思います。私は毎回、これを読むたびに、どちらが易しいんだらうと分からなくなってしまうのです。罪が赦されるということは目には見えないから、言うだけだったら「罪は赦される」ということの方が簡単。「起きて床を担いで歩け」というのは、結果が目に見えるから難しい。そういうことなのかもしれません。でも、本当はどっちが易しいか難しいか、でもそれはどうでも良いです。「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われました。

「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」

この人は、そのイエスと出会って、イエスの言葉をいただいて、肉体的にも立ち上がることができたし、同時に、罪という神から断ち切られた状態からも回復することができた。そういう話だと思います。ここでも、関係を取り戻すということがとても大切です。ここでは、この人の友人たちの存在、病気ではあるけ

れども親しい人たちが彼を心配して、彼のためになんとかしてあげようという、そういう人とのかかわりをイエスはとても評価して、こういうことをなさったのだと思います。

### (3) 安息日のいやし (マルコ 3・1—6)

イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。イエスは手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言われた。そして人々にこう言われた。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」彼らは黙っていた。

そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと手は元どおりになった。ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。

先ほどの中風の人々のいやしの話でも、イエスが病人を本当にいやせるかどうかということはあまり問題ではありませんでした。問題は、イエスに罪を赦す権威があるかどうかということだけですね。ここも、イエスがこの手の萎えた人を肉体的にいやせるかどうかは全然問題になっていません。問題は、イエスがその人をいやしたのが安息日かどうかということだけです。

安息日ごとに会堂で礼拝が行われていました。大勢の人が集まっていた。といっても当時は男性だけですが。そこに片手の萎えた人がいました。人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか注目していました。安息日は、今で言えば金曜日の日没から土曜日の日没までの一日です。聖書によれば、神さまは六日間で全てのものを創造し、七日目に休まりました。この神の安息にあずかるのは週の最後の日ですが、当時の考え方は、日没から一日が始まりますから、日没から日没まで。金曜日の日没から土曜日の日没までが安息日となっています。この安息日には何の労働もしてはいけない、と非常にきびしく決められていました。そして、当時、病気をいやすとか障害を持った人を治すとかいうのは安息日に禁じられた労働にあたりと考えられていました。しかし、「どうも、イエスという人は安息日にも病人をいやしてしまいそうだな、そうしたら訴えよう」という感じなのです。

安息日の律法は、旧約聖書には何回か出てきます。実は時代によって意味が変わって行きました。安息日の律法は、もともとはたいへん人間的な律法でした。安息日を守りなさい。そうすれば、あなたもあなたの子どももあなたの奴隷も牛やロバも休むことができる、という素朴な安息日の律法がありました。安息日の律法は自分が休むだけではなくて自分の使用人や牛やロバも休ませるた

めだったんですね。本当にそういう者たちのためにある。イエスは福音書の中で、「安息日は人のために定められた、人が安息日のためにあるのではない」とはっきり宣言しました。すごい宣言ですけれど、それは聖書の本来の考え方なのです。弱い立場の人々も休ませるために安息日はあるのだと、これは聖書の一番根本的な考え方です。

ところがそれがだんだんと時代と共に、理由付けが変わってきて、さっき言ったように、神さまはとにかく六日間で天地万物をつくられ七日目に休まれたのだから、人間も七日目には休まなければいけない。神さまのための休日の問題だと考えられるようになってきました。さらには、もっと後の時代になると、安息日を守るか守らないかは神の民か否かの試金石、分かれ目だという考え方になりました。そして、安息日の律法を汚すような人は、「民の中から絶たれなければいけない」。当時でいえば、石で撃ち殺さなければいけない、というところまで行ってしまいました。このように時代の中で変わっていったのはなぜでしょうか。紀元前 13 世紀に、イスラエルの民がエジプトの奴隷状態から解放されました。それをこの民は神が私達を救いだしてくれたというように理解するわけです。そして、神と特別な親しさをもって、特別な関係をもって生きる民として歩み始めます。その時に与えられたのが律法です。神によって救われた民として、神との関係をどう生きていくのか、人との関係をどう生きていくのかを規定したのが本来の律法でした。その後、律法は何百年もかけて大きな法典として出来あがっていきました。一番大きな変化は、紀元前 6 世紀にあったバビロン捕囚という体験です。イスラエルの民は、エジプトを脱出した後に、約束の地と言われるパレスチナに、そこを神から与えられた土地としてそこに住むようになり、そこに王国をつくり、神さまが立てた王様を中心として一つの国となりました。さらに神さまがその名を置くと誓われた神殿がエルサレムに建てられました。その王国時代のイスラエルの民にとって、自分たちが神の民であるという意識を持つために、頼りになるものが三つありました。一つは土地、神が与えた土地に住んでいる。もうひとつは王様、神がたてた王様が自分達の国に居るということ。そして三番目は、神がその名を置くと誓われた神殿が自分たちの間にある。その目に見える三つのことによって、自分達が神の民だと感じる事が出来たのです。

「バビロン捕囚」とは何かというと、その三つを一度に失うという出来事でした。イスラエルの主だった人達がバビロンに強制連行されていく。もうその土地に住むことはない。王様もいなくなってしまう。神殿は徹底的に破壊されてしまった。目に見える確かなものは一つもなくなった。その時に残ったもの、彼らの手に残ったものは何かというと、それが神の言葉である律法だけだったのです。神さまがかつて私達の先祖に与えた律法というこの文字は私達に残っている。だから、たとえ外国で生活していたとしても、たとえ神殿に行くことはもうできなかつたとしても、この律法を守って生活するならば自分達は



神の民だと思えることができました。これが厳密な意味ではユダヤ教の出発点だとも言われます。律法を中心とした宗教としてのユダヤ教というのはそこから始まっています。

律法というのは神の掟です。一番大切な掟はなんでしょうか。イエス様に聞けば、ちゃんと答えがありますね。「全力をつくして神を愛し、自分と同じように隣人を愛すること」。これが神さまの一番大切な掟です。新約聖書を見ると、これはイエス様だけが言うことではなくて、イエス様の対話の相手になった律法学者が言ったりしていますから、みんなそう思っていたのです。本当に一番大切なことは、神を愛し、隣人を愛する。それが一番大切なことだと分かっていた。では、それを守っていますか？ と言われたら、誰も守っていますとはっきり言えないのです。出来ている所もあれば出来ていない所もありますと言うしかない。100%守ったと言える人はいないでしょう。100%守ってないと言う人もいないでしょう。本当に大切な掟ですけれども、守ったか守らなかったかということは簡単に言えないわけです。それで、いつのまにか、この一番大切な掟よりも、守ったか守らないかはっきりしている掟のほうが実際には重要になっていきました。そういうものとして、神の民であるかどうかのしるしとして非常に重要になったのは、一つは「割礼」というものです。生後何日かで男の子の包皮に傷をつける。わたしたちの感覚からすれば野蛮な風習ですけれども、その儀式によってその子は神の子の一員になるというふうに考えられていました。これはやったかやらないか、はっきりしています。そしてとても大切に考えられていました。しかし、これは生まれて何日目かに受ければそれで終わりですから、日々の生活、日々の神とのかかわりとは関係ないことです。それよりももっと大切にされたことは、いつも問われることで、やったからやらないかはっきりしていること、それがまさに安息日の律法だったのです。

外国に強制連行をされていていっている人々が、その中で、「自分たちは六日間働いて、七日目には必ず休む」ということを実行しようとしたら、大変なことです。しかし、だからこそ、それを実行することによって自分達は神の民だと確認できるわけです。毎週毎週。そこでこの安息日の律法が、とても重要になってくるし、それはもはや人間が休むためのものではなくなっていく。そうではなくて、本当に神の民であるか否かの分かれ目になってくる。そういう面で、イエスの時代も安息日の律法が非常に大切にされていました。安息日の律法を汚すものは死刑に処せられると考えられていました。その安息日に、イエスは病人と出会ったらどうするのだろうか、みんな注目しているわけです。

3節、イエスは手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言われた。たいへん特徴的です。さきほどの中風の方は周りに人が大勢いたので仕方ないですけど、その前の重い皮膚病の方は、たぶんイエスと一対一の所でいやされています。そして、イエスは、「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。」と口止めをしていますね。イエスはだいたい目の前で出会った病人に口止めをし

たり、あるいはその人だけを群衆の中から連れ出していやしたりするのが普通でした。ところが、この時だけは違うのです。「真ん中に立ちなさい」。大勢の人が集まっている会堂の中で、人々の「真ん中」でいやす。それは、ただ単に目の前の人の苦しみをなんとかしたい、助けたいというだけではなく、そのことを通してみんなに問いかけたいことがあるから、みんなに伝えたいことがあるからだと言えると思います。こう言うんですね。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」直訳は「安息日に許されているのは」です。「律法で」という言葉はありません。本当に神さまが望んでいるのは何かというのがイエスの問いかけです。そうすると、彼らは黙ってしまいました。なぜでしょうか。根本的に、神を愛し隣人を愛するのが神さまの一番の望みだと誰もがわかっているはずなのに、安息日には労働をしてはいけないという固定観念が強くありますから、彼らは答えることができなくなるのです。「目の前の人を愛することが大切、でも安息日じゃないか」と思って黙ってしまうのです。そこでイエスは怒って人々を見回します。イエスはいつもにこにこ笑っているわけでもないのです。時々、怒りました。本当に人々の頑なな心で、目の前の人々の苦しみが見過ごされている。貧しい人や小さい人が苦しめられている。その時は怒ります。そして、怒るんですけども、「彼らのかたくなな言葉を悲しみながら」とあります。怒ると同時に、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われました。伸ばすと手は元通りになりました。マルコはこういう話をていねいに伝えてくれています。ここでは、このいやしを通して、「神さまが何を望んでおられるのか。神さまは安息日の律法をこと細かに守ることを望んでおられるのではなくて、目の前の人を愛すること、目の前の人を助けることを何よりも望んでいるのだ」と、はっきりと宣言することになりました。

6節は大切な言葉です。「ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた」。ファリサイ派というのは、当時、律法を忠実に守ろうとしていた、非常に宗教熱心なグループです。ヘロデ派というのは、ローマ帝国の傀儡のようにして立てられたヘロデ王家を支持する政治的なグループです。まったく相容れないはずの2つのグループでした。しかしここで彼らは結託してイエスを亡きものにしようという相談を始めています。イエスが安息日に病人をいやしたということがきっかけになって、イエスを殺そうというふうに動き始めます。律法の建前では、もちろん、イエスが安息日を汚したのであれば、当然石打ちの刑で殺されなければいけない。けれども、現実にはそんなことはできません。民衆の支持も得られないと思ったのかもしれない。しかし、「もうこのイエスを生かしていくことはできない。勝手にいろんなことを言ったりやらせたりしておくことはできない」とイエスを殺そうとし始めます。マルコ福音書3章です。まだイエスの活動は始まったばかりだと言っていい。しかし、イエスはもう殺されることになって

いきます。イエスが安息日に病人をいやしたりしなければ、殺されずに済んだのだと思います。

なぜ、イエスはあんなふうには十字架刑で殺されていったのでしょうか。当時の人からみて、特に宗教的な指導者やエリートの人達からみて、理解できないこと、許せないことは二つあったと思います。ひとつはこの安息日に病人をいやしたということ。これはやっぱり、当時の宗教的な秩序を破壊するようなことにみえたのです。もう一つは、徴税人や罪人と一緒に食事をしたということです。当時、ファリサイ派の人達はファリサイ派の人達だけで食事をしていました。自分たちは正しい人間であって、普通の連中、汚れた連中とは一緒に食事をしない。そういう考えでした。そこには、宗教的な理由がありました。当時の考えで、神さまの救いの完成の状態は、神さまの前での大宴会のイメージでした。神さまと顔と顔をあわせて食べたり飲んだりする、これが救いの完成だと思われていました。その救いの完成の状態を地上で表すのが私達の会食と考えていた。だから、その考えで、ファリサイ派の人達は自分達のグループだけで食事をしていました。そして当時のユダヤ人は決して異邦人と食事をしなかった。

でもイエスは平気で、当時罪人とレッテルを貼られていた人を招いて、その人たちと一緒に食事をしました。それはとんでもないことに見えたのです。そういうことをしなければイエスは殺されなかったかもしれません。

安息日に病人に出会ったら、「今日はまずいから明日来て」と別の日に治すとか、何もこんなふうには人々の真ん中で治さなくても、ちょっと裏へ回ってこっそり治してあげるとか、そうしていれば、イエスは殺されなくて済んだと思うのです。あるいは、一緒に食事をする中に評判の悪い人は入れずに、ファリサイ派のような立派な人達とだけ付き合っていれば。そんなにイエスは危険視されず、十字架にかかることもなかったでしょう。しかし、イエスはそうしました。病人に出会えば、それが安息日であってもその人をいやそうとしたし、神さまはどんな人も例外なく救いに招いて下さっているんだということを表すために、どんな人とも一緒に食事をしたのです。それはイエスにとって譲ることのできないメッセージだったからです。神さまは何を望んでいるのか、神さまはどういう方なのか。そのことを、この二つの行動はとても良く表していると思います。

このように福音書を見ていった時に、イエスが病気の人、障害を持った人、悪霊にとりつかれていると言われていた人と出会って、その人達との中に回復する力、立ち上がる力をみつけて、その力を引き出して行って、神さまとの断ち切られた関係をいやし、人と人との関係もいやしていく。そういう姿が見えてくると思います。

#### IV. イエスご自身の受難を前にして (マルコ 14・32—42)

福音書を読むと、もちろん、神さまは人間の苦しみを望んでおられません。人間を苦しみの中に放置することを神さまは望んでおられない。だから、イエスも、人と出会ってその人の苦しみを共に担い、その苦しみの中から共に立ち上がっていく、そういうことをなさいました。しかし、福音書はそれだけではないのです。福音書の後半の大きなテーマは、このイエスご自身が自分の身に苦しみを引き受けていくことになる、ということ。これは大きなテーマです。人間の苦しみをとり除けばそれで全てが解決するのではない、どこかで、どうしようもなく、引き受けていかなければいけない痛みもある。どうしようもなく避けることのできない死もある。それを前にして、どう生きるか、という大きなテーマがあります。最後に、そこを読みたいと思います。

一同がゲッセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」

少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

それから戻って御覧になられると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。

「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」

更に向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。再び、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠ったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。

イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は、罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

イエスが逮捕される直前の箇所です。「ゲッセマネの祈り」と言われる箇所ですが、イエスは、最後の晩餐の席を立て、ゲッセマネという園に行ってそこで祈ったと伝えられています。

34 節、「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」 イエスも本当に、一人ぼっちになるような思いがあって、弟子たちと一緒に祈ってくれと頼んでいました。35 節。「できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るように」と祈りました。マルコ福音書によれば、イエスは決して好き好んで痛み、殺されていくのではありません。あたり前のことかもし

れませんけれど、人間として、この苦しみの時が、自分から過ぎ去るようにと祈りました。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください」 もう必死です。「アッバ」は、子どもが父親を呼ぶ時のアラム語の言葉です。イエスはいつもそう呼びかけていたみたいですがけれども、ここでも「アッバ」と、信頼と親しみをこめて神さまに呼び掛けて、「あなたは何でもできるのですから、この杯をわたしから取りのけてください」と。杯は喜びの杯のイメージもありますけど、聖書では苦しみの杯のイメージもありますね。ここではもちろん苦しみの杯です。この苦しみと死ということから取りのけてください、とイエスは必死に祈られたと思います。そして、でも同時に、「しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」と言われました。私の望みではなく、神さま、あなたの望みが行われますようにと言って、イエスは神さまのみ心にご自分をゆだねていく。そういう祈りです。

一方では、なんとか助けてくださいと祈っている。もう一方で、でも私の願いではなくてあなたの願いが実現しますように、と言って神さまにゆだねていく。簡単に書いてありますけど、そこには凄い葛藤とかいろんなことがあると思います。私達の中にもそういうことはあるでしょう。キリスト者の祈りは、「神さま、み旨が行われますように」と祈るのが正しい祈りだからと言って、いつも「み旨が行われますように」と祈れるかといったら、そうではない。「なんとか助けてください。なんとか苦しみから救ってください」と必死になって祈って祈って、最後に、「でもどうしても引き受けなければいけないことだったら、避けることができないのだったら、その中で、神さま、私はあなたに全てをゆだねます」となると思います。イエスの祈りもそういう祈りだったのではないかと思います。

どうしようもなく迫って来て、避けることのできない苦しみや死というものがある。その中で何をみていくのか。それは、カトリックの医療従事者として凄く大きなテーマだと思います。

死で全てが終わってしまうというふうにする見方もあるのでしょうか、私達はそうではない。死で全てが終わるのではなくて、死を超えて、やっぱり神さまに信頼していった時に、決して死では終わらないというふうにみていくんですね。

マルコ福音書の十字架のイエスの姿は、本当に情けないような無力な姿です。イエスはほとんど何もしゃべらなくなります。何もできなくなります。十字架から降りて来いと言われても、降りていくこともできない。無力で、ただ苦しむだけの人間になってしまう。それがマルコ福音書の伝える十字架のイエスの姿だと思います。ルカは違います。ヨハネも違います。でもマルコは本当に無力なただの人です。マルコはそれを徹底して私達に伝えます。マルコはそのことを通じて何を言いたいのか。やっぱり、イエス様も私達と同じだったんだと言い

たいのではないかと思います。

おそらくマルコ福音書が書かれたのは、ローマ帝国の迫害のただ中にあるキリスト教共同体の中でしょう。もの凄い迫害があって、自分たちはただ迫害を受け、ただ殺されていく。仲間たちがどんどん捕えられて、殺されていく。そういう凄まじい現実の中であって、マルコは、イエスもそうだったのだと伝えたいのです。何が救いなのか。そこに何の救いがあるのか。それをマルコ福音書は言葉としては伝えていません。だけど、やっぱり本当にイエスも避けることのできない苦しみに直面して、イエスはその中から救われたいという思いで必死に神へ祈りながら、そこで、祈りの中で変えられていって、神さまにもっと近づいていった、そういう姿を伝えたいし、私達はそのイエスの姿を見ることによって、何かしら大きな力、励まし、希望を与えられると考えているのではないかと思います。

一緒に聖書を読んで下さって有難うございます。この後、分かち合いとかあると思いますけれど、どこかで思い続けていただきたいのは、この福音書のイエスの姿、病人と出会っていったイエスの姿、あるいはご自分の死、苦しみと直面したイエスの姿です。その姿を思い浮かべながら、それを私達の日々の働きとどこかつなげて、何か光をいただければと思います。有難うございました。